

青組

磯嶋勇吾

登場人物

寺門（前木寺門）

ヨロズ（矢尾ヨロズ）

サラ（三角沙羅）

炭田（炭田和宏）

開場中、舞台には何も書かれていないホワイトボードと教卓、三つの小さな机と椅子が置かれている。客入れの音楽には、妙にノリのいい太鼓と鉦の音が流れている。劇場の出入り口から三角沙羅が登場。手にはダンボールやベニヤで作られたユークリッド空間みたいな物体を持っている。三つある机のうち一番ホワイトボードがよく見える席に座り、鞆からノートと筆記用具を広げてじっと待っている。間——唐突にチャイムの音が鳴る。同時に白衣姿の前木寺門が登場する。沙羅は立ち上がって彼の様子をじっと見ている。

沙羅 おはようございます。

寺門 なんて来たんだ。

沙羅 先生の授業を受けに来たんです。

寺門 なんて来たと聞いています。

沙羅 わたし、先生の授業を聞いているのが好きなんです。先生の声を聴いて、板書をノートにまとめている時間が好きなんです。

寺門 その手に持っているものは何だ。

沙羅 これですか？ ユークリッド空間です。わたし、今日少し早起きしてしまっても布団にこもっている気分でもなかったのですが、学校についたとき授業が始まるまで一時間もあつたんです。退屈だったので、裏のビオトープを散策していたら偶然見つけたんです、このユークリッド空間を。きっと誰かが置き忘れたものだろうと思って。職員室に届けようと思っても、鍵が閉まっているんですもの。それよりも先生、早く授業を始めてください。わたし、先生の化学の授業が大好きなんです。ばっちり予習もしました。周期表を全部暗記してきましたよ。水素ヘリウム、リチウム、ベリリウム……

寺門 今日は数学の授業をしようと思っていたんだが。

沙羅 (あわてて) わたし、先生の数学の授業も好きです。インテグラルを誰より上手に描けます、見てください、ノートいっぱい書いてきました。シグマやルートよりインテグラルが上手に描けます。

寺門 (おもむろにホワイトボードにユークリッド平面を描く) 出席番号二番、三角沙

羅さん。

沙羅 はい。

寺門 これは何でしょう。

沙羅 はい。ユークリッド空間です。

寺門 では、このx軸を「やさしさ」とすると。

沙羅 はい。

寺門 y軸は何でしょう。

沙羅 はい。「興味関心」です。

寺門 では、ここはどんな感情を表すでしょうか。

沙羅 好意的に相手に接すること、友愛の精神です。

寺門 では、ここは何でしょうか。

沙羅 悪意を以て無関心を装う、いじめの精神です。

寺門 ではここは？

沙羅 好意的な無関心、見て見ぬ振りです。

寺門 ここは？

沙羅 悪意を以て相手に接すること、攻撃的で、とげとげしい物言いです。

寺門 では、(中心を指して)ここは何でしょうか？

沙羅 (固まって考える)そこは……

寺門 ミス・サラ、どうしましたか。

沙羅 (考えていたが観念して)すみません、分かりません。

寺門 (赤で丸を付けて)ここは、「理想」です。

沙羅 (ノートにメモする)先生、理想って何ですか？

寺門 完璧なこと、非の打ち所がないこと、かといって特別に秀でていているというわけもなく、誰からも関心を向けられず、誰からも好意を持たれないことです。

沙羅 先生。質問があります。

寺門 はい、何でしょう。

沙羅 それは、もしかして宮沢賢治とは関係ありますか？

寺門 いい質問です。あなたの考えている通り、このユークリッド平面を作ったのは宮沢賢治です。では、人間の理想の姿をうたった、賢治の有名な詩は何でしょう。

沙羅 はい。『雨ニモマケズ』です。(※1)

寺門 暗唱してみてください。

沙羅 はい。(立ち上がる)雨にも負けず、風にも負けず、雪にも、夏の暑さにも負けぬ、丈夫な身体を持ち、欲はなく、決して怒らず、いつも静かに笑っている。一日に玄米四合と、味噌と、少しの野菜を食べ、あらゆることを、自分を勘定に入れずに、よく見聞きし、分かり、そして忘れず、野原の松の影の小さな茅葺の小屋にいて、東に病気の子どもあれば、行って看病してやり、西に疲れた母あれば、行ってその稲の束を負い、南に死にそうなる人あれば、行って怖がらなくてもいいと言ひ、北に喧嘩や訴訟があれば、つまらないからやめると言ひ、日照りの時は涙を流し、寒さの夏はおろおろ歩き、皆に木偶の棒と呼ばれ、褒められもせず、苦にもされず、そういうものにわたしはなりたひ。

寺門 賢治がこの詩の中で「なりたひ」と言っているのが、まさに、このユークリッド平面の中心に位置するものです。誰にも嫌われず、必要以上に好かれることもなく、誰からも無視されず、人並みに気に掛けられることもない。そこにただいるだけで、誰の気にも留められることのない人間でいることこそ、賢治が『雨ニモマケズ』で説いたことといえるでしょう。

沙羅 先生、質問があります。

寺門 何でしょう。

沙羅 では先生はどんな人間なのでしょう。

寺門 (黙る) それは、今この授業とは関係ありません。

沙羅 (寺門に駆け寄り、手にしたユークリッド平面を胸のあたりに押し付ける) わたしが代わりに先生の心を見てあげます。先生は当然、ご存知でしょうけれど、釈迦に説法と違って聞いてください。人間には四つの心があるそうです。喜怒哀楽、といいます。喜ぶ心、怒る心、悲しむ心、楽しむ心。失礼ながら、先生にはいろいろ足りない気がします。

寺門 大きなお世話だ。

沙羅 先生、わたし先生のこと大好きです。とても慕っています。だって先生は頭が良いし、授業もとっても面白いから。先生の授業は、教科書だけじゃなくて人生のこと、人間のことをたくさん教えてくれるから、いつも楽しみにしているんです。でも、先生がどんな人間で、どんな人生を送ってきたのか、先生はちっとも話してくれません。だからわたし、校舎裏のビオトープでこれを拾ったとき、今日はきつと先生に質問してみようって心に決めていたんです。先生、あなた誰ですか。どんな人間ですか。

寺門 座りなさい。

沙羅 先生。

寺門 座りなさい。起立の許可は与えていません。

沙羅 前木寺門先生。わたしが知っているのは先生の名前だけ、それと顔も声も、授業の仕方もちゃんと覚えてます。手持無沙汰になったときに両手をポケットに入れる癖も、その為に白衣を毎日着ていることも知っています。でも、それしか知りません。先生、あなた誰ですか。どんな人間なんですか。

寺門 今日の授業はここまでにします。

都合よくチャイムが鳴る。寺門退場。

沙羅 (見送りながら) 先生。

太鼓と鉦の音が鳴る。激しい音楽。

1.

机と椅子はそのまま。月が青く照っている。沙羅が手にはークリッド平面を握りしめて立

っている。ぼろぼろの服を身にまとった矢尾ヨロズ登場。手には錆びついた抜き身のナイフを握りしめている。沙羅に気が付くと、おもむろにナイフをちらつかせ、照明に反射させて客席に存在をアピールする。

ヨロズ おい。

沙羅 こんばんは。

ヨロズ こ、これが見えねえのか。おとなしくしろ。

沙羅 まあ。

ヨロズ おれの言うことをおとなしく聞くんか。いいな、質問に答えろ。イエスは首を縦に、ノーは横に振るんだ。わかったか？

沙羅 はい、わかりました。

ヨロズ (ナイフを目と鼻の先に突き付けて) 黙って答えろ！ も、もう一度聞かぬぞ、おれの質問に黙って答えるんだ。わかったな。

沙羅 (うなづく)

ヨロズ へへ、へへ。やればできるじゃねえか、な、なあ、おれは人を探してる。大學生のころ、おれと一緒にたつたやつだ。おれはそいつのことを殺したいほど憎んでる。ひと目見たら、こ、このナイフで心臓をグサリとやってやるつもりなんだ。お、お前は、そいつのことを知っているか。

沙羅 (首を横に振る)

ヨロズ そいつの名前は、前木寺門だ。前の木、寺の門。前木寺門。聞き覚えがあるか？

沙羅 (うなづく)

ヨロズ そいつのいる場所へ案内しろ。

沙羅 (首を横に振る)

ヨロズ な、なぜだ？

沙羅 (手話で『わたしは先生がどこに暮らしているのか分かりません』と言う)

ヨロズ しゃ、しゃべっているからちゃんと教えてくれ。

沙羅 (うなづく)

ヨロズ しゃべるんだよ！ 口に出して教えろ！

沙羅 わたしは確かに先生のことを少し知っていますが、今先生がどこに暮らしているか、それは知りません。

ヨロズ そうか。じゃあ、あんたと一緒にいたら、寺門はいつか会いに来るか。

沙羅 きつと会えますよ。わたしは三角沙羅と言います。先生の生徒です。

ヨロズ おれは、ヨロズ。

沙羅 ヨロズさん。こんばんは。

ヨロズ 今日は冷えるね。

沙羅 そうでしょうか。

ヨロズ お嬢ちゃん。

沙羅 三角沙羅です。みんなサラと呼びます。

ヨロズ ここで何してるの？

沙羅 暇だから立っただけです。

ヨロズ そこに椅子やら机やら置いてあるじゃないか。座ったらどうなんだい。

沙羅 いいんです。今は授業の時間じゃないですから。

ヨロズ 授業？

沙羅 時どき寺門先生がここで授業をしてくれるんです。

ヨロズ すると、お嬢ちゃんは、

沙羅 サラです。

ヨロズ サラちゃんは、あの前木寺門の教え子なのか。確かにあいつは大学の授業は真面目に受けてた。教員免許を取得するために、教育実習に行くといっただけで顔を出さないこともあったっけなあ。そうかあいつは先生になっていたのか、そりゃ、おれがあちこち探し回っても見つからないわけだ。

沙羅 ここは辺鄙な所ですから。

ヨロズ おれとあいつは血を分けた兄弟のようなものだった。お互いのことは何でも知ってる。あいつの身体のほくろの数まで。

沙羅 先生にはほくろがあるんですね。

ヨロズ もっといろいろなことを知ってるぞ、あいつがはじめてキスをした女の子の名前、あいつがはじめて寝た女の子の名前、あいつがはじめて結婚した女の子の名前。

沙羅 結婚？

ヨロズ 知らないのか、あいつは学生のころに結婚したんだ。自分に言い寄ってきた女を孕ませたんだよ。あいつは真面目で責任感の強い奴だった。おれたちのリーダーだったんだ。

沙羅 なにか、チームを組んでいらつしやったのですか。

ヨロズ おれたちはかつて、日本を変えようとしていたんだ。あいつと一緒に。おれたちは最高のチームだった。でも、いまは離れ離れだ。どうして分かるか、サラちゃん。それはみんなあいつのせいなんだ。寺門はおれたちを裏切って突然姿をくらました。残されたおれたちは随分ひどい仕打ちを受けた。そして離れ離れさ。だからおれはあいつのことを探してる、見つけ出して殺してやるんだ。

沙羅 ヨロズさんは、先生と随分深いお知り合いなのですね。

ヨロズ ああ、そうさ。

沙羅 先生はあなたに殺されるほど、罪深いことをしたのでしょか。（ユークリッド平面をヨロズの胸にあてがう）ヨロズさんの心には、怒りより、悲しみの方がずっと深いように思えます。それから、ほんの少しの喜び。

ヨロズ 喜び？

沙羅 先生にお会いできること、嬉しかったんじゃないですか？

ヨロズ ああ、嬉しいよ。勿論嬉しい。それに懐かしい。今こうして前木寺門の名前を呼ぶたびに、あの頃の思い出が次々に蘇ってくるようだ。きみがあいつのことを先生と呼ぶたびに、身体のうちがちがむずがゆくなっていくように、おれの思い出が塗り替えられていくようだ。あいつが先生だなんて。

沙羅 ヨロズさんにとってはそうでも、わたしにとってはたったひとりの先生ですわ。

先生が殺されてしまったら、わたしはとても悲しいです。

ヨロズ おれは嬉しいよ。

沙羅 先生からは多くのことを教わりました。それはヨロズさんも同じでしょう。

ヨロズ ああ、そうだ。あいつから多くのことを教わった。

沙羅 じゃあ、わたしもヨロズさんも同じです。むしろクラスメイトです。

ヨロズ なんだったって？

沙羅 わたしは三角沙羅。「み」で、出席番号が二番です。ヨロズさんは苗字はなんというんですか？

ヨロズ 矢尾。

沙羅 なら、ヨロズさんは出席番号三番です。授業を一緒に受けましょう。そうしたら、先生に会えるかもしれません。けれど、そのナイフはしまってください。だって教壇に立つ先生がいなくなってしまうたら、授業は受けられないでしょう？

チャイムが鳴り、ふたりは着席する。チャイムが鳴り終わり、やや間があつてから前木寺門が登場。その白衣の裾や袖口、襟には、青い塗料のようなものが付着している。

寺門 久しぶりだね、よっちゃん。

ヨロズ 寺門。

寺門 なぜここに来たんだ。

ヨロズ お前が一番、わ、分かっているはずだ、いや……お前には分からないだろうな、おれたちを見捨ててひとり姿を消したお前には。

寺門 ミス・サラ。この人とどう知り合ったのですか。

沙羅 先生に会いたいと仰るので、ご案内してきましたんです。ご迷惑でしたか？

寺門 部外者を勝手に校舎内に入れてはいけません。

沙羅 部外者じゃありませんわ。先生のお知り合いだということ。

寺門 よっちゃん、俺は過去を捨てたんだ。もう君たちとは会いたくなかった。ぜんぶ捨ててここに逃げてきたつもりだったんだ。どうして君は俺の前に姿を見せたんだ。

ヨロズが絶叫しながらナイフを振りかぶって寺門に躍りかかる。それを辛うじて躲すと、ふたりはもみ合いになる。沙羅はそれを黙って見ている。

ヨロズ お前はぜんぶ忘れてしまったんだな、おれたちの輝かしい革命の日々を！

寺門 忘れるわけがないだろ、よっちゃんやカズくんと一緒に過ごした時間を。俺にだっては何にも代えられない宝のような思い出だよ。でも、それはもう捨てたんだ。俺の心の中にだけしまっておきたいものなんだ。美しい思い出のまま閉じ込めていたいものなんだ。

ヨロズ か、勝手なことを言うな！ おれや和宏がどんな気持ちで、お前のいなくなつたあとの日々を過ごしていたか！ それを、美しい思い出と、捨ててしまっただと！

寺門 よっちゃん、もう帰ってくれ。俺は君の顔を見たくない、しわが増えた。それに少し肉がついた。歳をとってしまったんだな、俺もきつとそうだ。

ヨロズ おれは、お、お前を殺すためにここに来たんだ。

寺門 そこまで俺が憎いのか。

ヨロズ そうだ！

寺門 (長い沈黙) いいよ。それでよっちゃんの気が済むなら、いいとも。

沙羅 先生。

寺門 さあ、殺せよ！ よっちゃん！ 俺を殺してくれ！

ヨロズ (落としたナイフを拾う) い、言われなくてもやってやるよ。寺門、寺門、殺してやる！

ヨロズはずっとためらっているが、決心したように叫び声をあげて寺門に襲いかかる。しかし、すんでのところで沙羅が割って入る。

沙羅 やめてください！

ヨロズ あ、危ないだろ！

沙羅 ごめんなさい。

寺門 沙羅。

沙羅 ごめんなさい、でも、どうしても先生が殺されてしまうって思ったら、いてもたってもいられなくなってしまうんです。お二人の間に何があったのか、それは分かりません。でも、先生ともう二度とお話しできなくなってしまうなんて、とてもつらくて耐え

られないんです。ヨロズさん、ごめんなさい。先生の言うとおおり、今日はお引き取り下さい。

ヨロズ ふ、ふざけるな！

沙羅 真面目です。

寺門 (沙羅の頬を張る) これは俺とあいつの問題だ！勝手に首を突っ込むな、小娘が。

沙羅 嫌です、先生が死ぬなんて嫌です！先生が死ぬくらいなら、わたしも死にます。

ヨロズさん、先生の代わりにわたしを刺してください、さあ！

ヨロズ お、おれは……おれは……

寺門 何を言っているんだ。

沙羅 先生、わたし、先生が思っているよりずっと、先生のことが大好きなんです。

寺門 それは……

沙羅 さあ！ヨロズさん、お願いします、わたしを殺してください。

ヨロズ (ナイフを投げ捨てる) そんなこと、できねえよ！(地面に伏せて泣き叫ぶ)

沙羅 やっぱり、あなたはやさしい心の持ち主なんです、ヨロズさん。「日照りの時は涙を流し、寒さの夏はおろおろ歩く」、そんな人間なんです。わたし、ヨロズさんのことを始めて見たときから、確信していました。この人は決して感情に流されたりしない、強い心を持った人だと。

寺門 ミス・サラ。

沙羅 はい。

寺門 どこまで知っているんだ、俺と、よっちゃんのことを。

沙羅 何も知りません、かつてのお知り合いだということ以外は。

寺門 君は知る必要のないことだ、今日はもう帰りなさい。授業は中止だ。

沙羅 わたし、許されるなら知りたいです。

寺門 許されないことだ。

沙羅 どうしてですか。

寺門 今日は帰りなさい。明日の授業は休講です。明後日も、その次もだ。

チャイムが鳴る。寺門退場。

沙羅 ヨロズさん、教えてください。先生と、ヨロズさんの間にかつてあったことを。先生はどんな人間なんですか。先生って、いったい、誰ですか。